

EDUCATION

生理学クイズ大会見聞録

大阪医科大学生理学教室 小野富三人

5月26日に東京慈恵会医科大学で第4回となるPQJ2019（医学生理学クイズ日本大会）が行われ、大阪医大からの参加チームと下級生の見学者を引率して参加してきました。この大会は、今年で17回目となる世界大会をモデルに始まったものです。世界大会と同じように、問題も解答も全て英語なので、各大学から参加する学生たちは生理学に加えて医学英語の勉強会を重ねて大会に臨みました。慈恵医大の学生有志からなる実行委員会が時間をかけて作り上げた問題は良問が多く、それが英語で読み上げられると同時にモニターにも映し出され、観客も一緒に答えを考えることとなります。参加チームは、早押し、ホワイトボードを用いての3分間での説明、山手線クイズなど工夫を凝らした様々な形式のクイズで熱戦を繰り広げました。

大会では、生理学会から審判員として参加された先生方と一緒に私も審判も務めました。学生たちの真剣な中にも楽しそうな様子、また彼らの知識の豊富さと確かさが印象的でした。表彰式の後には立食形式の懇親会も開かれ、学生たちは大学の垣根を超えて健闘をたたえ合い、各大学の事情や勉強法など、情報交換に話が弾んでいました。

私は2017、2018年とマレーシアでの世界大会にも参加してそちらでも審判を務めました。世界大会と比較すると日本大会にはいくつか特徴があります。特に強調したいのは、日本大会では問題の作成からパンフレット作成、会場の準備、当日の運営まで全て学生が主体で行なっていることです。世界大会でもマラヤ大学の学生たちがボランティアとして会場で様々な役割を果たしていますが、問題の作成や読み上げ、判定などは教員主体



大会の様子



大会の様子

で運営されています。そうすることにより問題の質が担保されるなどのメリットはありますが、学生に対する教育的効果という面では日本式の方が高いと感じています。自分たちが議論を重ねて作った問題が大会で読み上げられると思うと、正解はこれでいいのか、一生懸命に調べますし、またそうやって完成した問題に対して参加チームが真剣勝負を挑んでくる様子を見るのは学生の勉強の意欲をさらに掻き立てます。第2回大会を大阪医大で主催した時には、運営した学生たちが大会を通じて成長している実感を強くもちました。学生主体ですと次回の開催場所もなかなか決まらなかったり、事務連絡も滞ったりということもある

のですが、彼らの生き生きとした様子を見ているとそれを補って余りあるメリットがあると感じられ、この形でずっと続いてくれることを願っています。

学生が生理学の研究にもたずさわってくれることは無論大事で、それに比べるとクイズというのは底が浅い、暗記ゲームのような印象を持たれるかもしれませんが、実際に彼らが一喜一憂して問題に取り組む様子を見て私自身認識を改めました。生理学会の会員の皆様方も、お近くでの開催などの機会がありましたら是非一度大会の様子をご覧になってその熱気を肌で感じていただければと思います。

「教育のページ」は学部学生、大学院生、ポスドク、教員などを対象に、生理学教育に関する取り組みや意見を紹介することを目的としています。原稿はWeb（日本生理学会ホームページ）上にも掲載されます。皆様のご投稿をお待ちしています。投稿規程は http://physiology.jp/magazine/contribution_rule/ をご参照ください。